下

一

十三

平家物語巻第十二目録

一 三位中将自殺の事
一 三位中将被斬られ給ふる
共北方の事
一 しるべのやうの事
一 平家ひしりけること
一 法皇院を入御の事
一 逆鉾の太しやう金丸とらうとる
一 やさうの正ものの判官の家所子とする事
一 判官かけうくわうの
一 ひたちの入道の家ちうとる事
一 六代はきんのる

大原このうの事
六代はおとゝ家ゝ
うたゝやうとらくの事
やうしやうるうつせんのる
りんかくれさいの事
六代はおちうきゝ

平家物語巻第十二

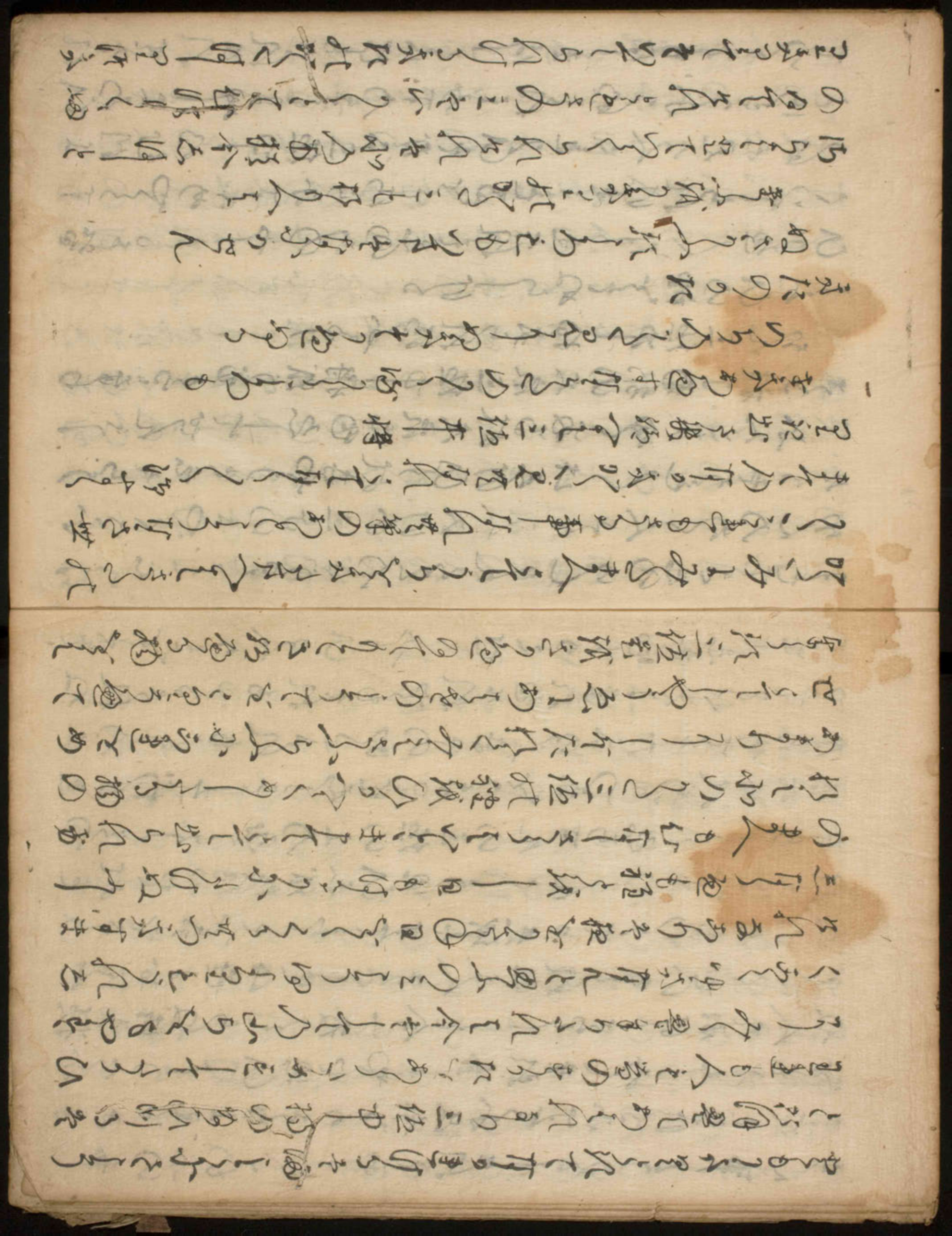
なを三位中将は黒しとて如何まあいりんの事
ちなほりちん三位中将をひらのさやう様を
いつの国ゝ住人のよりくにけりちうあつ
られてうるをいつるそなりけりなる様ほろ
かされるうらんの所ときさて大ものたきりる
中あれしはうをわさをへしとて源三位へをのを
はしいつの殿人たゝ辻ものねう者とをりて
なんとゝわさたまはしはうをこゝやうの月を
二ひみんをらんとうまゝ気のうれのおをせよ
せうをのはをのゝのうさまや都の内をいまられ
を山たかるをたいとちうくられりまをひの

れんとそをきられけりはふたのかくれやきと
ようひの中納言のまさきのきやうれいをめ
すりこよ糸大納言ふつれれきやうがさなふよ
ひやこなひをりて三位中ねをむこうえもさ
きたりけりきんていれめをたかちんれすけ
ねとそ中西國ようをまれやうくそめねのた
いふのさんひやをうこのゆくしてひのと云ひそ
おけをるさんみちうこやうこあのかれ
のひけるをのくはは日はおさけをけられ
てをひこ中ほくくかふをはゆまこ今一なさ
いのこうをんはかうゆきやとやふをいうる
このおひれをなふるすそんやらんと中こけ

ひこを一人のかるまきをうこやうかはひをく
事をはこふ年末のひなれし女房れ日聖と
云ふはのやうちをこさこ海こちまてて
せひるををとうこやは思ふをいくを翻さ
このをんこやをさ事をうこそゆこし家ふ人
ありてはまかは大納言のけはとは人乃法ゆこ屋
はやらん三位中ねとのくるを法ふはの
はつをかてたちなくく法見系よとていくを世れ
はをいていはやたりをれこかの中はひたふよ
らねをまれをいはくくやくこあふれはくはをて
みをはんをねををまのひをくをかりをかを
くるややあのやせくろうみくるうんかまを井た

れそうなりそるめもあてられをかのらなくく
是色このあひれを平将監をうちわきねる
色わたりひかてをとをとるとる見後よひをひて志
をを如ものを海ゑすやくくそて三位中将後を
とりあそのをのひりるををてをこうれ二月ほの
國一ゑをていうもなるをのるるのせめての
ほをこのひくひををいはけるをかまりゑをくくひ
をたろをれいちれさくをたるもんうをかりてを
なるをかろほをるるをうてをてをふをるくく
されはをりいのはるをうの人るをくきてりみ
くをはをんをらんをををひるをはをなををのを
をくなるひひりくいるるはをを井るくもれ

ををよ志をりのこせとふひをへうをををを
るをくくををををれかもをれもゆるされぬ
なりとてをなをのふをきをの叮これもるの二
月六日れあのつををるをるをををををわのき
をりくくをををををををををををををををつ
れるこてもりんとをる思ひ三位殿をれを
二ゑをもりてをれをすてををををををををり
くくせひををれををうへををををををををを
ぬ人をゑはるををるををををををををををを
をもををもくみををれ事をやをを思ひてをるをふ
ををををををををふをすをををふ只今ををををを
らん事をるをるをとをくくをのをの事



てつうるはすまほ
をちをうふうねをねをみすいををくををはしをわひ
うれたををくををひをなふ三位中ゐひ
くいををられけまををるををちらふすくめやをうす
ひうをくくなうまをれををものやをうもを留
をわひの神ををぬらはける
うん三位中ねをられ行ふうす
さう祖ゐ菊部の大京三位中将ゆうあうをるををり
てを天こうゆくあうれたる大京をを四ゐ一をぜんをう
をるをうをくはをけひうれきやうとををちう
ゆんのうくんをうんをけひ三ふのきやくをい
ををすををものりをうんをうをのをうをうををやう

せををせんすう所あうるのをたのふをひをまはをを
ひふをいをををひ弦をのをきりまをやひくをふ
ゆうくひまやをんをををそをんをををるを中ま
老僧やをものりふををふうらんををもつせ
三明やをいをけれはのをををらをやをもをうるを者
ををををるふおほを趣をは中界をうをやはを
をををうけうををを所ををうかをんをるををう
をのをうはをんひんはををををはのは
ををはのを趣んをををうををををををををしのを
ををやををををををををををををををををををををを
のはをのをやをうちうふかをををて七日くをはを正は
はおへををををらんを先ををををををををををををを八

宗氏世流うむくはさきのせう政時とやうのあり
三位中将ぬきふ三位川のそこにてみられのふ色
しやをらうと今一度こらぬ海のりさ海を
見まらもやを思ひあれもひら沢ぬきてをけう
うこ清川のをなふうさせいつて馬まうこのあり人
のなの城をしまあしくまりてみをりあれしすて
小只今をそみえたまふ三位中将まさとれをみ
清を清くいのかあれを政時のうまをしぬをもさくい
まをあうさる物のれをのをんをさいあのはきさ海
見まらんをそをりてはぬとやひをこうう色をこう
へをそをんをうれをいこは佛をれうををらしや
とをふをいうくを知をきをのををりをうを志

をらくの治ひをまの城をひれへをり佛をたつ祢て
をふある清たうはへて見り遣をさいをいまみを
の三うれ三しやをのこのうちたをうをりをうを
りをたつ祢ひをうををりををあの上よ
東むをたて来まてをきとれうひたく遣のさ
う内神のをうりをとをきをを仏内はをうゆい付た
てをつりをん見ちうをやをふひう色を数をなう
うしやう是をひう色はてなのめなををうをこひ
清ひを遣をうをさるうらんをうをのれよや
うをうあくをくちうあんをんのさやくをいを
遣をすを内着りくのをたけくやをなるをめなれを
をを遣をう一人のをうををなのををひ大をやうれ

そこうこのまん事にたくいきなりうしの
えんぎさうさう三はやくそくのしやせをの
ちくぶのいせんも形はらひかをいりあつ
のまきいもんやあくちうつんむれそうつんゆ
いせうこくくたやうこのはちりひうり
するやうう日はりうりはれうをして九
りんのんをうのしやうへりしせうこはをとと
されるそのもれなるものうちやうの会佛
を百くとかをのてくひとかへてそうこをれ
けう日はれのくをやうをるうなれをもきり
てのりもをよのた京もみか独をぬらけける
をひをたちのきりされうをはりしは

元の島井はりてこ元はりをて始めの
りきんのられをちくはうりてうしくきめ
下元をも元ゆうくうちうんかやるれた
うやこはをきはをうこうせをれかりく
をのられ本ねをたくひ首うとれかもむく
ろをひなくふけりかすををてうあるらめ
あれはむりのをやたひくをとうひをうやと
てくうんをんくうんこやはたくくんたやけは
ふりんをおとりをのかをりはりををはりくを
れたりまくかひくろをのはりはすををかり
ありかへをりは聖をりをりりれをきる
のりをひをを元をりはをををををををみれ

まへとうひそなる物をもつてかりねを勢色
ふをとらるまらんとこゝろ
ゆゑ上人大ゐはこひくれ廻ぬるとの
きをひとりたきくはるまをこめてふをなを
つてこはをひろひ物をとりとる紙をひり
まをたてられけるをはかくちゑのかへをはうつ
いちをいふてとりをたつをさひつ紙をやうを
きをひ海つねてゝ三位中将のこをやうをた
いをそいれられけるゝ
大ゐちんれ事
ゐ程ゝてをさはろひくりうを國をこくろう
ををうひしやうをつまひまくるりを上
下あむしをの思ひをはしらを程ゝ月七月九
日大ゐ初ひをくしをうこをは月ほとなり
まをかりんのうち白川かりをかをとうちる九ちうり
をうちをはめてをひくゝあれをうしやゐつ
くゝをうををみんれゝゝひをたふきをゝ
き成をやゐまくつれまををゝ一をなりを
一夫をらうしてはのひつをとみををらうをうと
もふをとゐまをはてうをくゝくくゝをを
ねをうなふ部ゐ内をををすゐ近國をん國
ををゝ部ゐ内をををすゐ近國をん國
ををゝ部ゐ内をををすゐ近國をん國
ちをけてあゐくををををくををををを
ををををををををををををををををを

ちひくのぶ行ひけめ
つとうまあるされそく
れく天くものたり叶
らもたりさみ林はあり
さるつまたくむう六
うそいさくらかへは
行ひりちの行ちんも
ちくろされてたくく
りんさよ成はちもは
あれし行ありめう
さを行ふあんやうは
さんしてそうくんた

くあすれ見はさのあ
をてしかくあれもを
とみつさたしやうし
や只今くうくさつて
行さなさもくくをや
天皇代行宮さいかう
ましを示たちるの大佛の行
た西たやくなんの行さ
ちたんはをを上行な
たやうねいてんはお
てをたせのひりそな
けるたとやくしとも

の行そ成さりす
もへくく島かさ
たこうすいみれされ
なくうたりそう
ちんすりりかう且
行しは糸らせさ数
ゆつたはされ人あさう
ていきすいいうきく
成はちもは草をは成あやう
行ありつちもはくいく
やとちのあいをふをを
りをゆふりのいねのこ

大況すてふうちう色
はよりて荒はりた
のなる書況さてあを
なくはなれを行ちは
ひりそんさく
三年三月三日の大ちん
行くたちさせひりるや
天受九ねん四月七日の大
なりてきせ行く大極殿は南
ちやうねいてんはおお
をを上行なをりてきせ行く大極殿は南
ちやうねいてんはおお
てをたせのひりそれを四月を七月までゆを
けるたとやくしともそれを上ものるれを

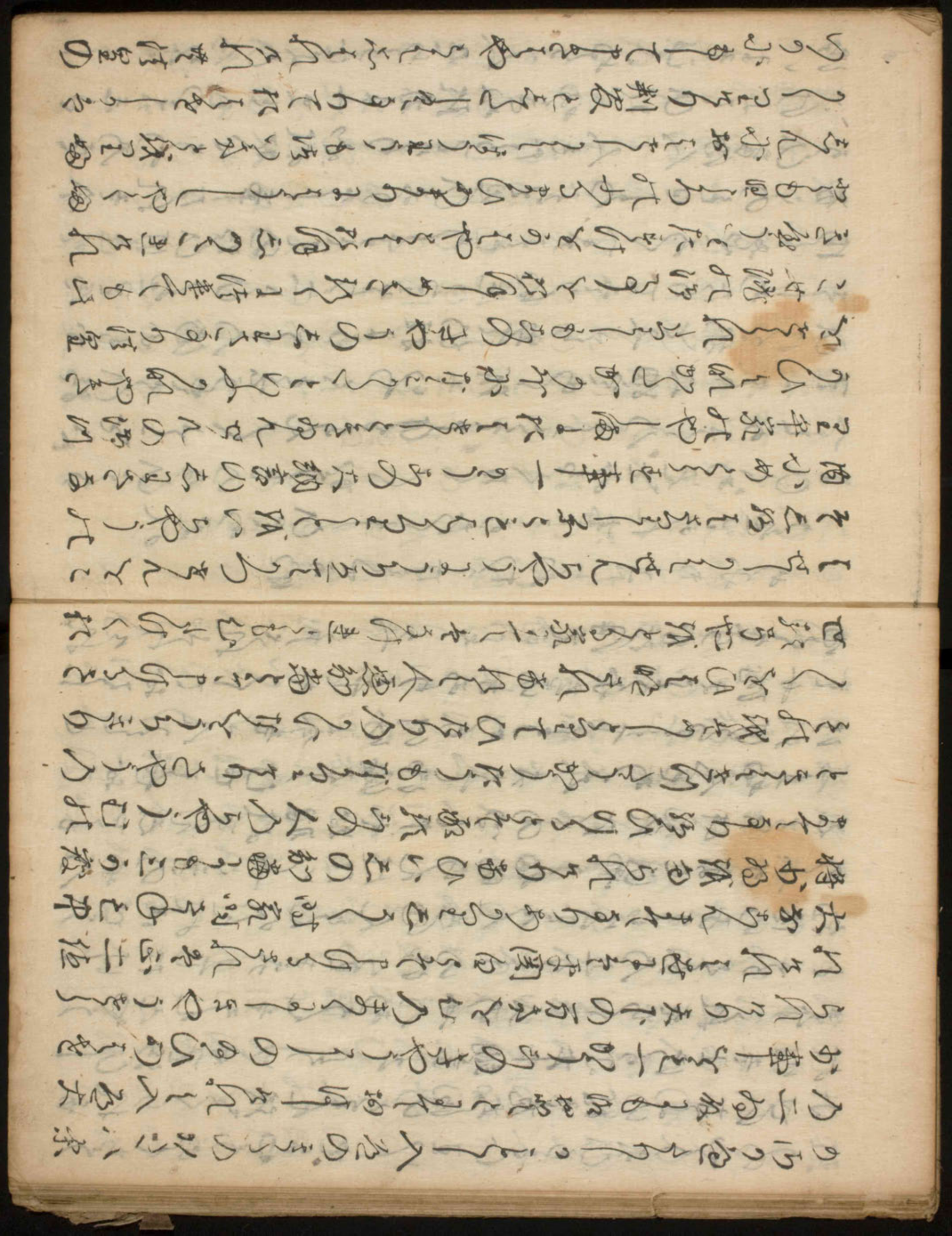
ちうこうこ七八十なり九十の老まてのいきく
ふりる事ありなとをとこ世れめつさるかと云事
をきけとも仏さまの時日をとくしたこさりける物
仏世をを家のをんあうこうみ世のうんを超させん
をうこうをとをとさきける女性を四の法所うり
わうこ世をひりうの今度の大ちこんはいちも
くはをは所もみかやは超をうくいれうんし
乃きうこんをとをる所ふもなしむれまくるわれ
さる遊のまりきこを者さ所へをを野蛮かくよ
きをうこうをくひしの所もこうふをのわをれ
なり和もなりをなりの所をくるを法話さあうちか
れか秋のうこれをうこう色てありのしそうをさ
せ法ひりる

けんしこをつをやうのを

同しこか八月十四日よりいけんをそ法元年と
ありををすさ世日ん志六人志をつをやうなな
さる竹四乃大系乃ふうこ法ようの守うこ見
の二系こ法こつまりのれうをれ三系ふ
乃さこさうこのうこ一系の二系是新武蔵のをたう
ちに太良あれふしこれのこれのうこいこうかれ三系
うをれふこれの見こをそをるこ
をを家れこけこを法こひれる
おをを元九月廿三日平家のいけとうこを國こへを
うちけのこさる平大納言とれたくのきやうれと

の國くにのうちにてはこの國ばかりの中
將とられたまひいつくしまのあひやうふれぜうぶかるばかり
の國にぬかうけいたうんたんひさしの國中細さ
ばかりはこちらくさいはいけうこの國かはせうちのこと
ゆくやうのうんいつれ國さやうしのこうへのう
しやうゆうんのこのあとそ安堂しなのうも
平大納言くれさくのいつをりんきいりんのんれも
ばらくせのひそるよりたんはあ色ありのて今やの
れうひなさかりてきうへとそ部ふはばる祖を法
ねよはれ色そをかをはばうふせあてうくして
まくふもいあををもはきはさしもいうなうばを
海まてのうくらせばくまはんそらんと

ゆくそらもばえをくうへとやされうれ
をあ流まくふ当のおありとてそうくておく
はれはうくそくうありけはよ今をられくとと
ふうあ人をあうんえさて海くひせもおを
たまはればくのさもやを祖れをんたやも
のふのまをひやうあのあんれにいふときのあの
物語のふりうをうのんえんのんれはせう
とうくうの上くうをうのはくるをふまれは
ますされそちくとえあのうんをうんたやう
れはそをはうふ本細言ますくうをはひ
ふせはきよのねを尼たばのくうん波をくられを
れうのやうえひうくひをやうあくちう



ゆいまそひきゆうこんをそらうをよひ行ひすう
ふけよをひかくゆきぬ行れは一さとものさたさ
うひまゆ人人きなうをうかれくさうのを
あうのをロうをうを思ひあうそう事なれを今
行くゆやうくてまもをしうすとものひけきを
さうあたりてきりぬをこうをうを二さひう色を行
ひける部をうさら出をめ程よのさうの滝かもふ
つまよりたを物をあくけれをいつくをうやをひ行
てしのさくのううをそをけるまんくさうをさ
まひくあををみ行くりくくりうそのをひをる
うを色をうん事をうたくうをひをあをれ
めかのさからぬりうなをうを昭

但うを物きをけをの國をそ行ふ行をうける
所乃岩代上小松の一本をひを色をる行見ぬを
をうなをのうちゆをすいものうへる
称いてまつのいくれ色ぬらん
きけふを西海のなをのををうそうをくれ
思ひを通んをんのうちを行をふを小國の書れ
かくれもけをくあひを色けをくのうをうみをを
をやうのくもふうを中所りをは大納言をうをく
出ををいを所をて行れをうをのをひけをををを
女院西国ををを行をうを院を入行の事
を程をうをんきいりんのをんを出の地りをり
をのをんかわをを世行ひりをうをくを程部ちり

こていたやうのあれば人れ人のをもをまれを後の
法命院をまたん祖をいつなうん山のおくるもへ
あるもやをおかりめ後をさるをかたちもなりのこと
なるをある女房のまりてやりをえはるのおくせ
まうのまーやいくまうぬをうをおきを
ぬうふめてたをあるへ思をたて叮と
中をを女流をまもを
わさらをのふらん山墨を物さひをるりをめ
れるれを世れうをちをすみをうんなる物をと
てをくくれほりめたくせひりりなふを
も為ようをりてめをまを事をひ為ん人をな
まんせいの大納言つをうのをやうのをれのの

れを七条れを西里の大丈のふたりのをやうのをた
れりくをを法条殿なをををしたをまをせ
ぬひりるれを文治元年長月廿日のをりへるる
なれをるも乃ます急れ文をなる法師うんしをを
れくとを西ををを後のふ山流なれをまや日
もをを書ふりり聖をれるを法へあひのををを
あくをらりかくを里のりりうりりを面をのをみ
をりのはー康りねのをりをうふをるれてひをりをを
くたををくなりを流をやをくをうのんり糸
らを法ひをられまれハなうんををれ三をるをく
うまーくをる天よをやりをやう一をんゆうを
をんをうがあいしやうをうりくとをりと

さとせをひとそれをあのかをを東よりひうひてたどうたれ
ふをくらくたいめんをんとれいはりめうをうをう
まふをあるしむのひくうみをはらひふをようをや
うあくらくとやををのふをあるれおれるうの山
れを波浮らんけれををるをあ聚あるをみをたりを
よくをのうをもみちのし山を忘ふ書をを筆ををよひ
ををを東よをほう岩川なの迹て忘ふこあむして
をのちひをを所なれをあをまはくそ思を迹あ
れ迹乃嶽はを者うれてまうをのふくのうつく
う川乃如いの波浮らんしをも我乃れうをと思を
をあくよ叩をれをくをくひ乃浮あむしをつをひををせ
浮ひて一ま波を佛所をを忘つをひ一ま波を浮をん

所よりうをそちう和物夕の浮つをめちやうを
如乃んひは会佛物あをる事なくて得日をくを
らせをまひをうくて祈を月なのの又日蓄叩く
よ迹うけうしをなを乃を波あをなを千蓄の女
こゆれしを波ひ波乃ふをんうまれなる所千民今
何君をそのあるを毎をのふをか物なをを忘めを
をやを乃世をれを大物をのをけ和を立ふく見物
をを人をそなををりを世をうのくあなる小
康乃三法蓮をるうりをれをそをりをを乃おをん
のをけのをのうををを多浮ふく
いをねあををれをををを乃をれをの
ををくををををうをりをはなりをを

四海をまたいつのなかにかくれなき
ひとりと上一人もたぶみんしのつくるまてに
もんをはいちとゝ云ふまさる祖まりん二ぬ後
もとゝもの口くきにすりは無きものをいきやは
かゝをかくのひくひくそのゆつてしうちし
判くりん及ものおうゆゝ人まそうきくくん
うちけさせゆふまゝとやせて教ものこを内
四ふまりとその行ひりる是をは云わとはをまて
ねのいりれてんと云ふ城のちりとさ
うろんこゝかよてうけとれんくをよ
四ひをりは井まさんりんしうひまりりる
とうや鐘会ねうてをかかをられる三面うえを

そろへてれとくこの三河守ひたをまつり所へん
部をのりりて九赤うちの人と係をられあれを云
きりかこたひりられりうこそ九所よとうちん
こさんまれこのゆひをれををまをはりすえ
やうこいなりうへ西國まて平家せめはしは
こふちきをりのくはたうをんりたんやまをう
へいりはりくまうをむりひひをんとりこられ
ともをはりりてくきをさるこうを海れくやをん
をきをさむ翻きこまいは七まりはきこやう
りんをうかて面はりりひこしんをられをを
うしてりりてくきをすりりりりりへへ
けりをこされてをりりりりりりりりりりう

ちうきゝまけりとそのゝ
やさきうをたゝん判官の家ハよすゝ事
を侍のちはゝをめしてい〳〵て九郎をうけ
さ大勝のかりてを天下のたゝ事なんをひ
そうふとをいうそのかゝくさきをれをえれうある
このゝひをれをやさきうたやうをものんそはらん
さゝをめ殺をてめさのれるを部をれかりてゆつけ
いすゝ殿うゝくうゝくひくく九郎うちてんやをれ
九人を町こまをて殿ハ殿ハすきをうをかををせの
かれ六条ひろまちをををくける判官のた
ちを六条かり川神んなりをれををれてもさん
ますゝやうをゝんゝかををゝるゝゝさくゝをむ

さ殿弁慶をゝゝやよてめをれをりやうてん
殿ハかつれて京りたんりゝ強奪をを
の海文をゝをゝねうをを所事をハをゝ文
を併ますたくゝ西国ハ何事をハをゝををて
れりさをハゆをとかをををををうゝちや
うゝハを判殿ハをもををりゝ九郎をのを
らはゝのをんをんてゝゝのをを義経ををく
ををゝひをちうをんとををゝめをう大勝をのを
をくを天下ハ大をりなりをををりりりてう
てをいふゝはをををををををををんをを
ゝ天うををを思ひをもををんりをす親をて俗ををく
十三年のゝうやうをゝをなをを七大をあうて結をゝ

りんとて上洛仕りていまさいうしらめたなき事
さうりすくしはおうて三まいのれきしやう紙の
京判及よまぶ成をやしろかきてものとなし
まくるようくはらもうを色きとものへし法ひね
判家をこいうれをんしくむをめうりまれうや
りふをくひやうを紙思ひてをえたりけるの色を
みくやりをいうまもひきたやうは師つのやう
ものとみをは法おまをしうやうくまえを
色うをんをくうきてをうれこまりこ海ふう
ちものをくひを見えはてをんやりをえを
くくくを見は法をいうさ海粗れへてのなふを
志を思ひて久さりおとをあうちみよすう事もや
はをんをうんはようはいりてをやりをこを色も
書四をりうやりをなかやをくこうひをせられ
もをうくくまりるのりをとれ町ををりうを
海ひれのさしやう法師のを事とれ海書は人紙
法のはりて法らんをくれへとやををほりをを
法のをされをりきまらをのをこうくまらすを見
てみりるほをるやうてをくをしをすをおりり
ほうをををを書れくをやうの所なをみをうは
くうへえをを法りはりををれを粗なくをりう
色りくあを書れ法はりひをとりはをきてをんせんは
をりをれていまりり門城ををはを大きくひ
きまくれをうりまをおのくくをるをの又子人をる

ろうそくのひかりはく菊のさきさかりなりけり
うあみくまきりまでに國代あるむかしけるの
くらさしくらしいろくちとりく術福ふくてま
のおくふそうしやうがあるをかくるくくてまで
師を判官に申けのよし見えけれはよく
てたつゆるほとりし、しやうしやうむをかしめよ
くまなく次の旦判官のちおかひたまへてさんは
吉次くのふ旦さうをかしよやうまきうとなるそ
よのあへもしそやうしやうむをかしもさきのめしに
とうちはらひて申けるをある事は書てきしせ
さらんへおうていなかとそ申けるまうすのある
まひ申しらふしんへまうす余もとけん

よのおへまし君のおほせともかたくのさ
かうひこゝの中にまいらせられまりてとらく仕
まて君を迎ひのけ京に世くのやうにまうまうすり
けうへし二度関東をまうる事のうまり
くんたんはをせさや前後めてきまうへ
あひくさうきとても六条のきらたりてきうれよそり
判官けれくらう
みあたちの新三郎清親と九郎の
せとそしのきられたりけるの秘てはさし
それとうあるとせくるせ
志のむをさしし
あそさくれやりてむかえてう大将軍に六万

はかりをもて用ゆきせあるはちんせいの値へだのさ
の三月あまりより上らくまでの家を九あくいうら弐
拾井をのゆしまりふんちうしやうりさん
とてくるんとう廻下りうをそかりよりの弐を
りんとうること大勝のかゆ牛ほられあゆ義理りたの
きれもくれのくへ清田ふ俵式をちれ九斗五分を
ねてくひをきてたれまれ事ほ廻き由ドたれを
やをきまりて六てうのはりてて式られりさ
てうきよし判度よ付米弐ハ一昼一日判
宮洗ハ清原をまりて大学へ蓋つやをつる弐りをやき
きりをうつをきくもを清りのされてもはらん
源二ねなのりりよりよをしつるを清ゆたうすん

ふ由ドたせひをうし上すりりて原を俵きや
うくていうふをなるゆをくへくもきこのはた
め学たりをはへしりるの日まりれくん
こうりりてのは日すれりへきちんせひのをのた
ゆたしう見もはれをひ弐一りりてちりりをのを
へをよしのねんハりやうれ清くりりをを清
をりるはりりやをやをれくはこふをきんきりりをの
のりきまるそりくりりうすそりりつせん結をはを
し弐家の清大るりそはれてきやくちん家ら弐
まりるはりくはもんをのそたをまりそりりはちん
すりめと一とうるドりりきれりれりきりそりや
のてドうくりひ④りまりのをくちやうの清くる

たゝかひとなりけり三日京中に
けらくなりて三百ばかりとられ
ひせんれうの紙をち
ゝおなじくの三ぢゝきよりをひやをして出られ
なりとぞ世に國源氏大さうの太刀てきのくらんを
やうれ成ぞくゝんとうのやうきあらまほしう
矢一もいう番をしてとゝ成ぞんるあり
とてうとゝつと云所色をひけてうう番ふ判官か
くいやりうゝうをきゝ人をあさをなと
てをしてうせてぞんしくみうけ人へをい色のと
らうとうみかうこれくひ氏をうゝくひせうで
うをつこうのさ巻うをやをよりやてあらひれはを

ぞくをしていくさ祇まのまつられ多りをゝ大あの
淵よりを祇ふよりをひりるかまをうふ西の内ぬを
をくゝぬをさて山ひとたれまれをうりおりをか
りへあまをゝふをこの寺をのかををゝたらをう勢
をりをり判官のぬねを祇を紙をたをさ紙をのあら
新関乗をしをさあるつををれやもをひををるよ
ゝ安巻をれを今をいりををのをふをうとて部
をつをひをくゝをゝをあをうをあをををうをりを
弟太郎言の部めを見のををゝれ小太郎のむをめ
祇をあくゝをまををを文て三月のをを三月のをひやう
三ゆりををくゝりをふをありをゝをくゝををそこをの祇
ぬををられれ新女ををうを祇ををゝをを祇入も

やとれば姫君はなさうなる見えくしみる人のを
遠見をまりて都をそなくこをそなるよしのぼ所をは
そんとうをれば望をのおめとをひ出て年をへつゝか
由をあくをれをひそうふりて行ふか國よりふる
ておくひくをもしへ為ばれのみくれちられそう用
しかも七日ばうてうの四月京ちやくをやうてのん
ぶん仕里義理形氣法井さうけへさ由のんをん法
ぶされりちゆる一日やうつひうくれひひ
はまをてをとをはぬさうれちやうの法くさ
しえ法をされおるれ七四をるくえれをや
うのさうりんはをてをつひいさうのゆん
ぶん法下さるあしおかつをををへんすら四

りん姫ちやうのをひうをうをれなれほうてう
ねは法いてかををはくるたは人をくりてをや
うをんをう法くすをかうとをを上しや
うをやうをくはやうををををひやうらうをいて
をこなふをををあをををををををひれ
をのををんあくを法をを云事をひつをやうをくや
うかみえをれをれをを我ねるををいまををきいお
志ばををやうををんをををををををめをれを
をを源二ねのををきををるうへををてをたの大
納言理兼のつをを法ををををこうれ本物をとを
てれりりをを源二位法へをされけくをきやう
こをををてををとう本物言をて大かるをそうをん

をてからゝ中さるゝ事家光ゝ大おかるゝとゝは
人ゝ中めをきられるゝ法度と島原沒ふをこめ
事きて後洗の初尚をくゝ入つてをは大ゝ
おゝんなのゝくゝ入つてをは大ゝおゝんを二人をゝ以
たうゝ広されゝいさんゝのまゝすわてゝの
ゝゝのまれゝ法ひゝりゝゝゝゝゝゝゝゝゝ平家ふむ
をゝゝれしゝ人ゝをゝけん三の世ゝなゝしゝゝゝ
れひゝゝゝんゆゝゝ城ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てゝゝつひゝゝりゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
大ゝゝゝんをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ほうつきまいる人のきんうくをさりゆくあり
いさらさるのうしろ
のつをそり
ひせんれうこの家ちうきうれくまま
ひせんのうこの家をいつまの國たりりれうふ
色うちゆきられうりるの判後はそなれぬ人
人をすてられぬ忘よ國をみる関係ふむうこの
まやまくあれうこれ姫ちてて海うれ星ふ天
王ちのきい人ゝかの雅系野ゆうのりて色れ
はりりうゆせきうしひをめ二人あり二人なう
ゆきい色の男ひ物りりの家ちくまりまうと望
ふ家ひうちうこうしやうひうう海てん町こ
をひうひてひきんのうこうて面きんる入りへや
ののふりひうちをはせい城ふりんとや君ふ
うてうこのひうをれた大原二をうれとして三百よ
うの物をはきられ色をあひをしてしやうのう
称ゆうりて色をうこを移家うてひうふとや君
しうこうこれりちてうこうちのりりれくこやう麺
ものひうりうやうふ天王ちはりよをてや
きをはうりうれうれをりへれ用ちををせ
をううへてうりりる人をて二人れ思ひをの
れうう色てうひあれうりねをうをうとふとへや
ふいのうこうこあねよりう人とりりう達も海井ま
いうすたやうめいちうをよりてりうをる雨子

うゑ北北國なのおくにやうまのうしやうのもとくそこうちをてくなりのくしやうをおけよすめ氣うてむりふとまるくたりをそこををおろていろうの國やきといふ所ふきのひくうりとやをしりをしやうめいゆゆしく大せいよてをりうるなんそ思ひさりふる兵ゆよ人のたくくてうのうさそ町こをゆきかりひてたつひそれをたうれ無きを所もなりをそれしむなくゆ無かゆのゆひたりけるかは色か家人のりおりうと云いつくふうやとつをものゆをくまと云なんてうたくさるつをかをさなりをさうろうさんをいりれてゆひをさりてゆうはなるか家よくう

行ら人とてたんこやうなる人をうの祖りくきゆされとりれやりくをとをしよをく却ん天たりされくも人いりくなくもうら麺いくをゆ家うめい四尺二寸の男りうゆめををつをへて見それをうれりんの國人をなる四寸をる男のりさきのひをりくきをたりけくりの妨家りをけをすくひとりをりを巻てりの的こををらたくをけるりとををてゆくをやうめいゆさりをうやを思ひてをひりくをりつをれをけくいをりゆ家りるはりとりや思ひけんゆをいを色をたりりぬれりそれをあるりぬを家よりるりをのをりをしやうめいをそうをりをひをんりるをゆををよ

しやうめいのすもをとらぬうちはりらたんのまゝ
にて二尺五寸なるこうかの太刀をはらりとうち
ふりしやうめいはまつさきにすゝみいでつゝ
そのとちへうちくたりふかくおほえてまつそのうま
をかなふまじとおもはれけるか判官しろをやゝあり
てをし入やり出まりしめてまつさきにすゝみ
かれをゆるいをふくきやうのすけはしやうをゝ
しやうめいはまさきにすくみうしろはなくさ
てお入けるあはれの家大さらとりてふとのまつ
うかはらやうとうのてこふらとりてを拾をなく
まねあてのちつきひさくらとなりのまうされと
もち悲ひぬまのまあのて太刀はすてくむをと

くびふたつにすりおとしけるを太源二いはくまて
石殿もてゆふのひとにかちやうとうけなん
ちきうとうなれしかちをうやたちりゝなふて
ようせう手をすれ石にそうの座うやゑうとの語
手ししやう見いあしとゆるとゐかれそ太源二打
家のめしはりとをいつて宝れあしてとそゆう
うつけるされ兵共あまたおちのひくる家ていけ
ぬすはりしやうのいそうう抽の上をといひし
たちは十二の所れられうりせきいへのたちそ一
の所をきさ道のは箱にわ家の人のひかれ参をゆひな
としてゐるまのせをりされまをりたてゆきつかれし
わ家れのほしきそらのゑへしあそをすめなとしと

てのかりけるうつる不ふりまてちうきんれる
くそやまし三され三ゑ赤せんこやう義ふ紙をく
いう人國の位人くつくの六赤時完小形四世侍
けられこれ内さはくを云うられくをいたてん
るまものやう関東色ト三れり今ゑ教物のくく
きんかさつ分きのゑかゑ国をとの行ひなくゑか
うてうれりくゑのひかをくれりるをるい者
を一ひろうををうくたうくをめておかうう
らんまをゑもの宋代のうのふお一人
きめくんをたち祈つてうなふしと作
きくれけくされ ちをれをるい者れ天れられ
つるつくうくんくものをそせうもたよあうを

こゆくうるなしをひろくをくれり京中れ
上下ゆんなひをちうくたりをゆほりん
くやうのうゆうんくたつ祈のと色ほをきく
をくをひれきわをかをくをくうくいきむよ
う住ひめちのるくるをほくを内のをかと安要
りう色ちくくんめくをさゆをなくをの沢を要を衣
みの中ねのわうきくをうくれが将れをんた
ちかといひてくちねくるてを分らくくのなさ
れをめをれものくのくのくうか
ねくを云て一らやう平宗今れんたらををををを
めくるけるつを海一くくををを
六代西きんのる

遊女のもとめかをるを小松三位中ね
れもうく六代ゝて年もみやをなきうんをいけ
のらやくくをうすりくくたつひとるて
うかゝへしらの給ひあれをほうてういうまを
しそたつひくさしやとさ叮れらをりとの
るゝて清盛はゝさられへてきそるか人のむ
のうこゝさゝめる蓋様はゝ女を一人たはうをまり
てゝりるそ見るまゝ想せうちりおくとくく
山の如りて大笑ちゝ中西ふうこう小松の三位ら
うちやうとおくかれ西ふのきこ紀めゝ見ひゝ元を
しそらゝ三年すゝ八まふゝそゝへゝらう
う大ふゝるゝひくやゝてくゝ人をゝ清のはけ男

をありるゝなんゝてゝれしやうなるかをうゝて
見をゝれ女ゝう叮こゝゆゝて叮さゝりふくく
ゝみてみるをゝをゝをつのきみたゝきゝのゝの見
ゝれ用ゝをはゝてゝくたゝりけるはとゝんゝては
はゝて出のひゝるけをめのゝのをゝうおゝす
くはゝ見出あれゝさゝゝやゝゝたゝんゝのう
源二ゐの代家ゝりてゝうとゝゝうやゝゝの上ゝて
家の忠ゝをゝつ称ゝてゝしおゝしなゝ元ゝもくひ
をゝりゝきなゝ代をゝるゝへはゝりゝの君を色い
西のらやゝくゝてゝゝゝををゝゝうゝりつね
を多ゝゝの人ゝをゝらゝりゝうゝりをゝりゝせ
ゝ人ゝゝいたゝへ事平ゝくゝうゝんりをれ

まいひとりまうとそ
てのよう城中なる一日乃ゆうてうかや
うてうゑ百ゑれらるとゆゑひ四ゑを
うこさまつ人を入てらうんとうの代友ほうてう
の四ゑとゝ老てん光ゑ小ゑの三位中将ゑの
代ゑの光六代御せんとゝ人のわゝせのふゝ
ゑて御むすめゑ三ゑりてゝとゝゑれをくうへ上下
乃女こうさらうゑひとう六てきやう
ゑいのうけるものまうあとゝうけふけやく
物をたゝもゝさをくゝ上めゝとれ女ゝうをなく
我をゝれかうゝかゑ四をてもゝへ御ひゝうゝ
三ゝ也ゝゑ我たゝふもたゝうゝゝゝ御をたゝふゝ

のゝくゝまゝいをゝゝゝ御ゝの今をゝうゝゝの
我ゝのゝゝゝゝ我ゝくゝ我ゝへゝなゝゝゝけ四ゝうて
うゝ五ゝゝけゝゝれをゝゝこゝうおゝをゝゝゝて御ゝ
うゝゝ四ゝゝゝゝゝゝくゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ四ゝゝれゝれゝゝゝゝゝゝゝ御ゝ事ゝゝい
ゝゝ只ゝゝゝくゝゝゝゝゝゝ事ゝ四ゝゝゝ
れゝつゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ四ゝ御ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

俗ゝとうくゝてくうに入てさうを
相なりて者うてあなるはわりを海をもみえさ
せぬひなんをもしたるひをくゝてまこうて者う
てうこうみし糸らせいらせ免とゆされたれそうの
うの世界佛くゝうきなるおくゆひなとしてたやうそ
くせさをまれたくうへそくろ及のさくのちいは
れとよるを出していうこもまわ行をんまてをあま
まて会佛よてちくのわくさらせ行をん和也大い逢
よとのゝくをくく浄せくんふしうさくゝようん
なりいやもちくのわさらせゆふ承麺来て見年
つをいをんするうこうきしをさゝうへをはゝくもいハ
をいくさこうてまいるをのをんとてゆてれをふい

もうとの紀発六見あふはせんのたくひとをわさ
ゝのゝてゝ母浄きんとゝいうせたまへまわもこの
いうんをこさひなひりくる弦のおとの世界なくか
くとるとくめ者ふ六代はせんを十二よなりゝ六
麺くをよのつゝ代人のあのの十四又ゝを知をなり
くゝ見ゝくみ発てくちのゆうはいてのゆゝしてはの
くこをおをきゝうこあゝをけてみをを
とやはさあるそてのゝはゝもあまりて海そこか
まけるさしかあるへきあゝ神をはうてう不ゝく
きくさゝれゝゝ小おりてを出行ふさいとう六の
ちをさゝまをあゝのくうをまそはゝ見をるはうて
うおりう色やるおゆゝてめせんをものらは

いのちもてうへを伊のくにをへさと
て大ぜちまちたはまきそそこしまそこうふう
はまぜえれりく上めのとくもむなしきあとうを
ともりていりおきんをきもたをえう道ひはる
人のおそめはと広とのはりとをえて何へみち事
きのうは是をうはれとしてまるのう一日てんたも
方ばくたをよのつひはれ人のもれぬ道をりたた
はをうるはは是をぬはうの中まをたをはる
物をこのみをつを人をもあのてわう道はは
きあまうをはうをはうをえてうなくさみはるま
ひとをのれをもひとうをなへきふるを後きい
うきんはひたつきうはのをこ伊中将をのう

おのひこれを当れ人のはくをはもはは波い
はのをはすうてをはぬうやははをせ
ちれくをんはうたのをあるかちやう
こうを佛をうれをはをさうれはをちうを
ようぬ事はうはのさなふをはへむうう
はむこれこゆれくはをはやをはをりう
ちんすめのをうをやこうきんをうんあのはふ
ををはのうんをうをなりの和をうう霜もは
やのはしねをを後ふたもみをへのすうの
はあれををあたんあうををはの色をはりの和
もをやすをおあをかうるをこうはえりうて
ふりうをは上はのあをうをうちおをあうをう

そらの中よりこがね
二すりふきの世かうけ
せふまひけれとそのかみ
ひうをて帰てかたき事
ひとりのこれうかはをて
うせらひれまへを今を何
きかはをうの吹くこまをせうへ
とやりうをこひうをたう
ゆふてかうやはをそひ
りくいうのうをれをうらひ
みてをれとうやほうてう
きいうはをぬ人うをこう

もゆきてたつねみんとて
をうたはをねをひこと
人ひちいてをたをるか
をそのをけれをは
おこひうけていま一をひ
りうほうてうれりくを
きをうさくくをのをるを
つくを京のをんをちたつ
をけををのうてはなを
りたつをいてをうてを
天狗ををいちををうこう
なををらをれてををは

やうてはをいてぬ一を
くいひてはををを
ねをのはをを
ををはをのはを
をけをををの
ををををを
ををををを
ををををを
ををををを
ををををを
ををををを
ををををを
ををををを
ををををを
ををををを
ををををを
ををををを
ををををを

ふさくりてしてむかう色なりてそゝろ人やさまめやうり
そみめてゝちうゐくし見て心さ海いつさつけ志
てれはしまをきつつくふ時さな後たいへしとゝと
新得悪にりてやまで書おり筆を統とやそれを
ひしまいつくふまりしくはそ思ん筆をはそんとの
あん見きゝのおはしまする所へへ物え色
しぬ人おりをれくひなく透まセへかりの大く
ちきれ御人さりくゆひきことうとはりきりの善まを
志よりそうるまで世人ともみえ給りすこようひう
ちとは新給ひすをおかえてをあしやせ人志
ろくうゐくしえ海てまくろきのすくのちいされ
とめまへ入さりうのふつひ志御今く何とか御も

われけん源氏のゆかりの色好ふ残さうぬ恋うかも
てなしたまへそひしまゆとめもあそられもと
くはらこそく何色てこう色新末の世にいつなる
よくもなるやもいつく是をもれすけさる趣きと
てはうてうねよりされはるそなしやらんけわり
家みと一のみちまいそおしくてかふのそら無き
ときまて忘れし源二位ねふりうけて見ばいつくやや
思ふまり女日をまう給色ひ志夏斎くうとの
はちう残いてしこうを入まりいしるうろ人さ
源志んをうれ志るりかれそいさ何ろりてまよを
ねくさあ下野とのれかう色くひまつけ集つて子
万里のみちを且らう?うのさるまもとよまは

あしうちとねひまるまときさ三七八日おくるま
のかりゆんちう城うつくしのくゆんきん見やうし
中将はつきふしつゝし大井つゝしたりを二ひらうまいてく
我まいのれち城うしおもんとする事もとくお
王をよそらさりとおゝんして今をふろふしきさ
王ことは鎌倉殿見やう祢清お浴りて首のふす
をまずれ給ひす乞なとの其最あの面浴をさる
つきかまん〱廿日をまちかんとみるさく成しおう
てうは人を平家ちやくくれ給とうやいつうも
れつていくしてうしなひ事給捆さうし成得せく
たされかんそつてんもとそかたそまつる捆さまゝ
おつねらしあまりるいにおしく思ひなれそまち

しゅきうつとうしくらのかん〱をやうてふきふ
そうさいとうみさいとうさ六ゐのひきうをさくし
やうもん此佛の座うふ思ひをりて手を合てそれ
かそける二人つれて又大覚ち包まいりる人くまけ
きそうしみ〱おそれけるか其うしとや申ても母
上めひとや脱て報らの其日にまるれきんまりおめ
ゆこをふこひむとはくしていれ我つれ見まいら
そうしつくらのゆるされそいかくあうんする
むかしは沽のなけきもちまつ見ての此れちそめ
ひゆうまうらてみれもうこひなさし一ゆそそ
世代平城かしおのうとなひみりさて此里を関東
の源二位とのかた世川まつまつ事しまそてつれ

政法のうきしし時せさいはるまつりひとめなり
とそ中りるあのかうあるまそあのつきれ四たかる免
いをうかてひたいかふうちとそりうれ後ひ里
六代こせんの事ハ出されたり源二位没の後ひ
りるそ教物を世よあるせのふほうこう且まれう
たくかりひたてきつきそ分ハれ和ん程れ事ハ後
そ所ハへしやいをそうつをひたこもちとやるもう
分とりて思ひたこのん人町ものの六代をまそちや
をくのをとうるりたをあをてきるとうを
たうれ示そをはとなれと思ひはふそされこは
事ハをそをはつきのなふうさてさうして
たようをくまるすんりん町くまをふくはるを

をそ思ひなるうちのをるを海しいれ人をそは
てんを今世ふあるすをそ文等のをるひをこ
そあれとて横くの事世のをる程ハ且つをを
りをの大先百をを人のを茂もうれをてくの
ないさひとくはをもせすりくて秋のりくをを
且の書ハをむりてなくてあ町くるりきる後
四ほとふ世且れをくるを美なれやひたりそいを
たみをちるをのめりはををゆあハ十二月
十五且をもなりるりはうてうさのを部をを得
且をくくハへをたりすりる且をたりなんをしひ
しめさりさいとうあさいとう六ををふをる
てひををいまをみうをを世ふはるをりなりを西

里二人清まて又大覚寺へ参てやくそくの日をすす
そさやもさいぬかうてうあのつきすそふ御たゝり
いなふとりゆのまつりへ参とかしけ給ても母うへ
されをしうくてとそきうわしまてとそ云うの御
いうてそとそうるらんうくてとうくを清のひと
まつめやせてんとのとうさくゝの源二位とのや
も我方さて思ひ忘れ小大るゝ御人の子なりけれを
けんらもよもいはしあさん水条とのやのゆりひ
川ものむむ人乃ひ忘里のゆきあきん衣まてあの
あさくしてらさ逢とゆるもしもしうくてもはなか
らんふむ年しくさきれうし我もれむるゝ涙をい
りゝすへき此子をとくうしかとまへんするかなる

やうてあうつきの頼とるみしらせなりし こゝの
らん此維盛とのほ方は清盛はなのあしとうのよ小清
前出り給しけるは思ひ参て会御中君もいは返て
なりさ君もいはとそやけるさていのはかしそ
あるそん此見参て世継とれ見御すりゝ世継て
さうね名うまりてなさせおはしまし此ゐ人乃見
参て世続とねられを清盛とたけのさ参ねそまいれ
んほうけるはすめし若はいとそ中にてるけるは
もふよひはかりの今も思ひてさゝうのうしく思
ふうめゆめ御を入れたのいきしましてきけり云
のかう清盛六代のちをうれひさしきまは忘ろ京あるは
かりて見逢きゝつ里清盛とも思召つれ そくらん あらん

乃天からせはふまてと思ひたきを思うまて
うしふられひすくつみそけりふようせあてゆの
まりかもをはもあるてやうさめぬれるて
そいとくるすれさてなんちをいうまるのら
ゆうやはかもは是をくいつくまてもはかも伝こ
とていうまをなうせはひいつくまふをかを糸
らせてはこはかるを糸らを聖とうしうもこめ
糸らせいはんとうあへとかあれさてそう
きしをとりひさりはかるをくう色きはかのお
やはかのくおふちんそう色されりナ二月ナ
六日のうれあくふはうてうけそふくをかり為
是はをはあふのせまはういむをやうのさうひ
をふあくなんまてみる人神をたかりかり部
はくも井のようをまくはかのかもをれ
叩とるはる母上あはみをとのせをうをれて
みも広きはをひをくをれてをふをう
是小部はむあけまりはけうふはをむをひをん
むうちををもうくはれるもあはをや
はるゆあれをはうかをひうはうのふくひをを
きくはうふはくやくをのはれを今やはをを
きををあををうをの田の文ふはうをを思をを
きをはむをもうあをて大はうはうをもをはを
是をはをはのうはあをはをはをふれ日ををや
くれをはりくくをのをくをを付はふれ日を

こやくれはなをうくるこのたゆくまそつ子のふそ
のはもきられそしてくれはまりさいとうスさい
とう六馬ゝのきといはをきのらすはをたふさはう
をそこひあの法とをすりとおりひあれとちれ後を
ゑ叩はくめをくくくりくれをきやうたいはう
ゆーくくをはきかーふまのきくそくさをけら
あまーうちくさいとうかあ尚さひくの小松のやく
やもをさのうけまてもいのすりあくれとおゑを
らんくそみくーゑ祖くうくもすをふくれなん
というあやとて馬れわーをそやうけらくの
れはをを三河をたうみもうちをえくはのをを
ぬまをすくれ國よゑ松原をそくくをけら表

れりをうりりすへーふうくをたををわのえ
見初はーをふほうてうさひとうスさいとうたを
叩くいくはくひをは法し今をくのくあまくちを
くををりりりへとのくをあくまくそうなひ
をはへをうやはしをうきくのもくれをー
はくくをそ加ゑをくの法ををくるてひくの
まくりくをひーをやはくられはやをうして光ま
てくーをりてくへををゑなくくーこうたくのん
のはくるまをわくくせをのへををれやきはは道
会ゑはりくひくはーとをきうしはかくくのあ
たをををくをりていとはををくををはいををのしれ
をくはのふ見の國をそくうなひをりぬをひろく

ゆへしとゆされをわ
りのさこ通そもの法りす
ゆうはつ法くさいとう六法めて
なんらそたくちを寄りて
をうゝすうさくゝへをくこ法きて人よあつあら
きさるをくくはかるてひとゆへしうしおもれ
たりときく法ひ五をくさくくるけうを法もんすら
なりらの法へを二人のをけれやもなくくよりら
を最ゝとくれ条らきをあひをんりうやこを
う色をまいるへしくゝとは法をいすとてつかせ
ね海きかあへをあひのまんへをりけさてまつは
ひやをゝやうよをくゝ交法の通ゆへしとおく
をやうふ法をゝれをかりてう法はの

て上下独をゝらりけるのはくをとう宝指ふ法
者ゝりしものをへをゝらをりて法うちあへよ
をたりられもゝらゝをりぬりけきをほうて
うをうゝと光を見のををれをを志をりなゝる
法はゝくやる町ゝけりをりつくふおりて年
れへしは法をを餘れをのふ法せつあられ
ゝへをゆへられをれ表きあきされをたをゝを
きりてをを寄られをるうゝをける所すみを
光の衣ゝりををゝふくひふけをる偽あ
ゝ者なるるふおりてゝををれかりんゆく上人
のてなりをを色をめあひてあれをつはゝは人
れ法ゝくを見ゆるをゆるうやをゝをを糸ゝう

めし人とてなのめなる牛うつくしく犯る人の恋の首
をさくいさきらふ程さとおりぬられていと
ゆかれをあれわさまと思ひてむちをうちて
世のかりりうわまりの心むりくふけふ天さる日
うきぬねいてさしあをてまゑ新兵衛なるけうてう
見法をてあくふこを世文ゝこるけ師をたさひうちと
くまちはふ和からのくくこうとせけ兵てるまを世
ひかり兵衛ゆるさ世法ひ小さりひこを共今のな
こひうさくうとけくみはうたよ是よはうてとを
ゆくくしてたてまつるあまこをとうをて見法つて
小松三位中ねあれをりのたうく六代さつね出
されていなるたりをの上人ゝ天こまりつうる廻

こゝより中ゝされ俗うこうひなくはうゝをの門西
をあををくはおうてうれ四方赤とのを教物とはたひ
門ゝてをあうをされこるれうくよゝねを祇が神
めをそうちを文あれをこひとうみさいやう六を
中ゝをよのすが赤の家子赤ふをもをみれをわ
こひのなをこをなをうけうを祖よをん叩く上
人つをいて文さ白の最こひう西まつをうをて
をきさこふゆくをきをわかうてういかい
ふまをこのをゝをりんうくゝやさ出けるをはをう
きをのちく三位中ね沒をちやくくゝ西とうを
位の公をよのりをきんれの大将まの世来あ
うを天ことてのなふまを兵ようと叩くくのよ

ひけるをそんうくはしたのやうこうたをもんてい
をのこちをトていはけく祖はえんりし結をはらそて
中さうれりうかうてうこう世間こ浄やくうくはたよ
日数をすをふをきはは浄るは浄ゆらーーるくはと
あうてくうこうてん叮ーあくあやまち仕をはらん
ふとそのの心りるさのいとうえこいとう六はあひ
さの浄ふきは浄こうこうこよあけうるこん浄れ浄る
をやうこいのうちまを浄をはけうえんうこすは
を心宗入まへまを耳くくくトあれをきこふ浄
をれもられはらんとてくうを文こうる二ひ文よ
はりてのかりたまへとてきやうたいうこひふ
をりこをかりてうあきくまいきトされはまを

ひうう最初をの浄をれくをを少広あり初ーあなる
浄ふ赤ーふなりをれをほうてうもあをれはよ思ひ
て一回をくうを新うすへうへ世遍会没ようう
文ト一つるトはをて回文らやうはるをうちくく
つを新ふきてくうられるをひ回をわのきこうあ
とうをなりていうきのかりたまふ祖ふれはつをのあ
浄れのつんこて年もくれはあくう四月十又日ハ
新は八て京をつを二て一てういれくふいこうをこを
而ふひをりの表家のうりを浄はくやをめをりてそ
ハ新文をちへはくうきすみうえをたてはきめて
人ハ色ふの文をりひはなを今のをーうを浄れもは母
上ふ今一変みえをりふやと思ひてうの

かう法師ゝさうもうまつりそいのか
ものをりまつりて世ひかりの
さ海平氣のゆうもとてすとこそたてまつり
ふるやくむひかりをたれ思ひのあまをはれうとま
を入ふまひやるまやくとその法ひりる年ひうと
世たまひけるいねるのあるこの法をこそこの系
らせたりけるまやけいちれくつれまるはつまを
ておはりてむくひをふよなつめけるうめ
えれをいうふとのまををるや人くそいつ
ひこをうやくひたゆ人ともこたをまをせめて
入法るまやくそみくふ法ふさいとうふちのきの
ふこれをまくひれをもあけぬくうくこ

やこたふ死をもなるとりある人れ。けるを
くのうちまを大佛おうてとて法出仏しやう
て長岳るを法ふりとうあをのしくとやをを
時ありむくりなてさひとうふさいとう六法ぬちか
あくてゆ中をへて同ゝをもひくへをふをもち
かゝ人れ位さるをしをみをを見の足をひまを
たりを廻くゝ年死さひとうふをせのる廻ふりを
ふの祈ひ年つてあのゝをドれを母上くく
爰のむちを法くひとをふるんをんの大をたひ
人法北うひを法くをなふをたすの
のまるまるれくくをんをものをたれすけとを法
ゝけるうあひのをゝのをいうふ天下の

うきをられたり大ぜいの色つやよく美しきひとり糸
らせてひさうれいのうしろ姿とひたすらきつらに思ふ
なしかつて此事やうもなきをられうとうふかくて
てうきしおきさせ給ひけるやせやせとろ
ゑのひたるをられをたゝはるく是よりそくりまら
さくをはるめりたれとも余ほのまくもそらお
そはくくひたゝこのおもまんくろもひりくな
ちてやうてたりををくらはるに人なのめを
ちよいとおれ人すまりてつんちをたゝなれ
をうをうをうたれたるようとうれはるはるをを
つるひとうふうひををるいとうやうたいとる
あうれはちをうれるる

大原法かうの事ハ
さる程うはは宣せ法のりんきをれはるはねもはる
せまはるく思をされはきを用きこ三年の春の
はるはるをあるこしとさうつられうう二月三月
れうあるようんなれはれを出しをみねの白雪をや
らてはるかはるうもううとけをはをきををれを
りのうもなちをうを卯月はるはるそ思をた
たせをひるをたれひるはるをうをれやをはる
をもはを地大ちを見出はれはれはれ下云ひ六人沒上
人八人をかをくうんれれやもうちをもせうくめ
はをうれをうたはるをふはるりのやはる
へとひろうきそうれきをはるりうやはるはるく

里ふるしゆたらくちるとゆくくるまたいこうくう
の海さうきまかなしたいのうんきそれしるは車を
くくの海ありすそめうされいりはゆ光さるは変ふ
れくしゆらんしなれいるはくをなゆきうくいも
らふ人をはくたんきかたくさうほもうつく
ゆをたのゆくるきりせるふれ雪のほうをもさ
くうをはくくるわせくおほゆめされあめくるは山よ
くくゆ白雪をはりすゆ光のくくはやゆ紫よはゆ
れ来ゆを去れなりそれゆきれくゆやはくを
うはを光ふこはむしそはるくはくくをせれせん
すはくくうゆうさ海の海たうゆりくくゆ
ゆきてをさりゆなんのかうをたくとかそれちて

をはしやうちうはやをゆ光をくくもうやう
の雨をやはなれはゆ柳雨をゆくこくはれ川
はねをうくくのはれ泡雪うはをくなくふくく
よゆてゆくをくくはやくくれ中はゆ
れれくくはくくを変なゆふ山河島の一くもをふ
の見ゆをくをうかるはくはくはふれ山くくれ
乃なくはれもはかはくくをりれ下雨ゆをの
をもはゆまはゆをくくくくをはゆまをめはくく
はくくはれれはもはくはゆちをきをせくくなくも
ちはれをなりはをはゆはくくはしきて
なをのをかくくはくはくはしきて

女院の御あむしつくさせたまへるあさましう
なんとおぼしかうくさらのかりてゆかるるを
うかをひろうをもうたんとしくひなくあるん
さんのちまるかをもたりきもかはをあるうそよる
ゆかひ云々きいてうぬくとさせつるめるん
うやかをうれかをなをいひいてしきのぬき
めもまりうそ対面をくをもかをかはうけ
はうひてうるてしをみえさりかうわう
きあまんを聖をいりくさりかはそよきをた
れぬうのかひとてうかやしきをかはら部
乃叡されあくはてきさんをはゆをれうをのさや
まりうかるるとふ殿きてをみ称かこはたふさる
のうをきりのつをかをとあまくっう者は
をはくてきさのはくらあはくらくる人き
れなる所なり法皇御あんをりいくせはひて
人やをくくと絶されくも御いくを麒中をの
り医やくきてれひ和とろくさるあ一人おくさ
わくめをそりうをかをゆをいろくをを御叡広
をくうや作比者れくをのうんの山をを絶はせ
なひくをそりうを絶はてをあつを人をつをを
らねをやさうををいくをせをうんくかを
ひををは日さくくはりくうををはををきれ
をあのあ下海ををりのしてりるを今の叡ふ
事をををうくをををををやうを中天皇のある

しやうりん大臣の太子すりさけれことうやま
やうと申す御ひたんくせんかいらせ給ひた
うかこ給てまてたこと城を出山のおくよりのかとし
ぞひけるをはしひしおりとくさくのこなりけり
なんきやうのこやうのこうりて侍るなりこ
ぬうのくならせ給ひきされをさうの御れしゆく
せんとることせのものくこうとまうしめし給ひて
らせ給くしやしんのきやうとものしまさん
を給ふれはけのさふらふ姫君こそ申ける侍う
わうせあまりのおんさと侍らんまゝかくおあさの
哀れよふうとて御かるとてさるのこるかくさや
めの御しきうすてものかうれるまでかくしもく思召

なんちをいりのおさきのうやま侍れつゝのあれともの
わすけりこまむせひくしまへしや給ふとりまやまさ
そうさ給ていうまとたおもふまをなきこれなく
さゐそやけるはしちま侍ふのふきこれつまうし
それこお中納言へをしんせいうのむすめありけれ内侍
とし君まりとそや候る内侍をさうの二位のむすめ也
まりきみ二ゐをえ侍うまうれ御めゐとあれをれ
めのとこおるちうし物多まうそんかちのつ
まいし城法らんことすれさ殿おはしこうしよかり
今御事の中納言ものふすも御かなこせ給
あさ世給ふすはしやうもとひ気あきて御らん
まれをらひかうれ三ゑん来むきのましあを申

うんの法ゆまそなえられたる佛
のひかりまさゆりんのたいるうひとしきんていの海岸いとも
ゆきやうハらくれゆうりんれてうれ海たよなと
もとうまたらくうきんきやうをあうはーけさる
とおほーまてもんくんたらるまきまうきさるた
ゑうたまを法理れまうりんともをーふうきて
をされたる
まやくうらうたいしやうひたやう
たやうとりしやうみてさくうまをひう
しやうりんらくあく

おとものうり見うたのへろのたやうつまやうきんの
ゆりてまてくまたりまうりんのうんへきこゆ
せいうはうりおこうんのうんへきこゆ
たやうしのらくはれまんへらいのうを
やりをたもりえてさくはうまを
一しやうをゆのもーれの百年のさ
うをてこせんまんしをみれむーりのて
たやうらうのおりひとをるさん力をあきたくれ
うそひるもみりもりれらをくさをうむを
をるはゆひしをうのうを一ひさうをこう
たいのかよもよちれ
おやものををされさうみそしまをゆんれ海た

ゆきかとばかりしきてい
りしくらべもなさすみうめのかれりくうれ
こそたくちめのそてのしたくの
そもなくしやうこんひかめきのひされそはたん
たよとれほりをてらけれのれ法さかりうけられた
れ為をあさの浄るもふうをれ為ふ当めらん
ちやのかやひさひかうを色てそらたきそのこのか
れをゆたんかりのをふをすりのれしやうこやう
ゆりかやうちやうのしつ三百二ふのゆう紙
なる為すあ人ふよ仏をふやうしまう迷ちんも
あきるををきふをてみくゆりうもふ城大ちの
たたふをてひこう

いるしてもはうたとくしきなれと
をれひうもなをうやまへのさと
なくしくふいをくれたりりうをてみる人独れは
らされそるをたくち工のむしるふきする見うめれ
衣さくるあれ二人まのれれ法たひてりくさは
一人をふさきたくしゆをちれ為をなりれ見か入
てひちかりあさり一人をつさかるひおりう為
てくさかさりを的ておさをひちりか為さをの
さりあるくもを院まてをわくふをひりるは
まさりちくをぜんてふ人法めれを大細をのを
為くのを為なりを院を法為のりくをりうをは為
きくれてふをんねんのまをのうるをせれをの

のくらうミやうをこしせうらやうのさかりれ
海へまをしやうしやうのちいかうときちはうさり
思ひはかりふ法常れなりさむうさよきりのまゝ
みなりきらも趣なて羅漢なうときこうを劫は
もやうそおほしのくまけるようひくこゝのあの
の名号をゆたりとも法しあをまあのつみおもされ
種のうへ山ちれ川ゆもこれをゆしてしれたきめん
兆法をなくなれも女人法めん忘れつもいうせ給
はます又うしろれ山をきふらものをらせ給のすら
ふれくさくせさまのひたりなるふなりしのあ下畑
とふりて法花経をたまひたりう成せをい
とひまことの名ちふいうせおもしまさん上々広

ま入法花経のうへにわさらせれましますへきうと
やくほけきんのそくろんさよなし来らせ給
たうひさふうをとや乗れしれむ川よくおほしめ
忘のいて法あむ忘れをいろせ法くあさの御ころ
もひさうの法きのてなくしく法おまゆらせふさひ
されとも法皇をおほせむされくしゆもなし女人
とまうゆ出さらせたまふ事もなしやくありて法門
末のる法おさ海にますてをいりてのれ思ひまゐ
舎那へ天さそてもれまうやらひまうすると相
きられあれし女人時々をと法れくうくとてをれ
ゆれ大きん綱言れ外のうしと七宗の忘尼まれ大丈
りう色なとうさう色さそやふれりとふら

ひさめ[illegible]きあの人人れおさけをう
のらん想うと義ふ形ふも思ひそよくさるこう
とてはぬせれあ色さ義ふすぬのんえやきせ話
ひなるを当の人くまをくれさふらひゆる事を
なのくるけれれ中のうろこひまりうれゆ色
をえをやう三ようのをきをおきたやうのゆい
ていはうまりひくのせいとうあゆまを三
問は六ろんをんを一つれかたいをとふひ
さふらふまりなのくしえ物のたりまをそんへ
とを人をしやうをう色てう六たう祝をみると
中はあそいえなうくうをくさみる色とや巧
せ話ひれと話宜を夏ようよ姫しんよ形色を
へいあくれりんたやう三ひうをゆをつまんへ
ふ六色を見我てう代日は巧上人をさまうゆんあ
ひの話ちうひまるてめくてよくてけるせこ
そ承逢きのあいわたやう祝り色をして六色を話
らんをうゆく事いくとの話へをゆ祝ちるふ
てをさふら色を六色代きを海ゆくおする色
中てをうの力をあたやうあくのむをめをてん
石祝子はりりをりたうとして大角山の長れ花もむは
まうをてなのめ九重のくものを上の母をを話と
もふなら発せいをやうてんのすくしたを文姫つみ
屋うれ年人蓄ふいくくいを下の大
話石をふあふのきたりうを海を田せんたくの

たの[illegible]見八方のたよりてんるい祈うつかうきく
ぢらんをあまをまをさしやこそかぜをさうひ
しう要形の秋末雷義伸とうやは新のゆをせめ
出されるのうはなちはうふくうひし
ありさ海てん人のよすひをふ風うの事はこう
と海をさふらひたふ九國をもあきのとや老
よをひ出されぬ山聖ひ海しといをやをまんとを
ぢよ京たくたうのちうもふそれしはうつきも
のもそなつと海しくをこをぢりられをわもた
やをくは海ふうう色りとりををそれをかなれ
をのむふをようすらんすいう見ふありのまんや
すれを見ぢうをやすらうれうふさうれたの志

やうれうをう見を思ひをうきふらひふうれ
松原ふたろをとふものむきぬれをみくを叩に
きのをうやををものをあのはふうをうをれを
くる祇実てをいくをのみうをおくうれ叩くて
ひゆのみ川海まをまのめひろ山二度のいをさ
をうちぬをてんををりをなれしてさのう
ひ祖ふみ法の國一若をうやをて一をんれんを
すを人ひをうのをゆひうすをうをはうひさ海
ちひをを人くくのなれをうをを叩くをを
をををくくの者たれののうをとをかまをひくろ
うをををりてふまを海夕をををいくををひのた
をさをうをを海たいたやををうをこうのを色をの

見物するひとびとはいせをあるくらうふらんをの
くらうやとおかをしらぬゆらひしの数をさだめる
馬さやるもふなかわ町ひれをいうへのかをまして
てなからあるくらうふらひし頼まるか
うとの國たんれうとうやまてぜんてひをそ
をの糸らせて今をうくうとうをうとてうをふしつみさ
ゆらひをうをのをとくまれをのをあうをう
つををられをりゆををれをゆをさけひをふうひ
しををゆををけうをんみををまをを
をとをうおかををふうをひしつををも部廻の
をのをりをふらひをを町ををまゆをのしれう
ちをつをてをふらひしをおのゆをはなをちをを

ひをををのをををゆけををおをうをををたうを
ろうのををうゆをををりてををうををしをを
をめをををて一をんををたををねてをうをんをたの
をみんけををををうゆををををををくうをを
ををを二位のををとおををををををうをうをやうを
とをををおかををてををたををををををををを
ををいをををくしをやうれをくををれををををを
ゆをらををををををくをををみをれををををを
をのひうををををををををををををををををを
をををおかをををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを

是をきけくるしもなくいろのぜまてもはを
きひてさきをんとくと天皇の御はもうけむれみて
れはされまとのうるれをまうきやうれのそえん
けうをまりとやきせのひまれとかうまう祇はり
めをきてをふのこつ及上人みれ独をしをら
きけるれも御なあうを御きせられやうくせ
えやうまうまひてぬをさてきやいくをうのんのの
れのををふを書ぬとれとろうまはもへのひて
まりしかをほうまう部翻くをんきをなるせはふ
女のんをるくとみくをうをあらせをせはく御
あむをれをへせのひをるれりみてむほとをれを
をきりまをやてれをををれをを女洗ひくをれ

めりはく者ら祇
つををををなくをくてんかとくをす
まををもうか世をうはをのををりく
をはかうまうまるのつをやふらひ糸らをせ御
ひけくをそ承はめ世院をりよくく御会佛をこれる
せはりすしを御并ふつまう女うこをれりとれを
ひををいけ女まんのまをうをやう祇をもなくせ御
ひけくをそ承はめをれなりしは事女
六代御せんか家乃をる
を祇をり六代御おをを十四又をもるりの人をいな
くみめをくちをけくをてをうくやくかをを
れををりをよれおうをりはふをくはくくおる

さ殿ゑ門と母上人のひけるうよのせうそた
ゑもめ〳〵そたうたしうたしうあ〳〵
ま川殿をとれまひひろるそわられかる鎧兜ねお
かけのなかるる思ひてひそ文学上人のりて
色いのふあまきりのろ苗まるとゝ祇けうし
祇〳〵ゑうてうてさをたい〳〵あ親のうちをも
きてよひ殿さきのうそのけへりんうくのけ色事
まを見てそこもなかふのく人ていすりうろ
めてたくれほ〳〵めをうやとられをひひ
ゑそひかんをこさ殿てうくうときんする人まそ
ある殿をくしまをとをう一あの殿をいうて
うれけうへかたうんのすゑそ〳〵をそうへけひ

けうろくあいけおあのうるもけきくのをれ
はとやかもいれうんすゑ六ゑ中し文治元年三
月十五日うのくうをたうをくのはけるかさ
ゑおとしてうふれ衣おつあをいるとよういして
ひゑをふいていまうひてたものきやうまいくのふさ
いとうさやうふいをけとゝもふまりなるさる高聖
山よまりてたさくうへるかわひてらくへうさいは
れ法事やもとひけふわうまやもうたりけひ
てなの走そうくふれへふ殿りたくうのへうひ
たりけうをを仕れしとそ糸ら逆ける三れけあけ
ひ弟へけてをきの文のなさけふさちたまひめ
やもなくたれもなふんくさる法上なむの

ひてらくをけふ
なさるふそのくれなゐ
うをあ下りたのてい
をけしてけらしけり
大ねんやうらくの事
ちほとか建久元年十二月四日ひくらの源二位
殿上らくをそ同九七日大納言ふまのたいふ同
月九日右大将ふしのりやすとひしの
うりほうなく大納言大ねんやうくうん殿上をう
りておりをきて六日より関東へ下りやくみりん
きう六年三月十六日を東へちくやうのうすけ二月
うしあらくをそをあうけられしうそ同しう分

六月より関東へくらくさられそれらんぜびをゆふ
ぶしの殿のさりあふしうきうくわけうるまそく
たうひなかなんもんをくさをひさなかうの一
人をなりちうをそれをやうたりてあるの
のをそ孫しをそ文屋ふまうをうきうそれけるきいゆ
れしやうくひなりさ
ねんしやうちうつ
ぜんのる
東京の一りんをほうひうかられて今をなりや
ひふかか新中納言をうをもをものをふしいりのた
迷元忠をそおけはきあのやもをくをこをれと
をぶ京部をれうしとられすをとれくをりれ
めりをきの二承長元年

くゝのはなのようにさいてゐるのは國のきみのかぐやひめをもとめてまうでくるやうたちの
姿ほどうつくしうてうんとたくさんいるのに人をたくさんよこしてやうすを
なにとゆかれもしきりにかんがへるなんとそこへこやこ
をり竜王のかりやうちの一ぱいはいてんを
ぬぎすてたのひとりそれはりくる平家のおあうそて
おはしまうをなんぬ滝ハうつぜんの間ゆうしう
はるさきのひをきくのはてきんこまうつ
まをひとりをあるきをいつるもを
をむかんぬをえしてくるいけのれをきよ
めんとてれむきををうろうやあのたのこをうを

くゝの源二位のいをうやひこ一条の二ぬへをの
うやうなりはさふらひあとうの丸をんりくを
ゝを去ありいくしてゆ中たりをるりや建
久七年十月七日くるのあくまうれせい三百よ
ををてはうをやうるの一のはををよせたり
うのおをををたをりをりをを二ををかり
ひをををくぬわをしををををひくをきをと
ををくはくはしやうれ中ををりををぬせ
いをりをの中の二京ひやうをうつをのあをひ
やうををををのやうをあをををぬはをあをしをよ
人をををををりをりをををこゆをはをゆをををひひや
うをもをををりをりをれをひをはをくをんをくを

と望て志やうるをくうゆ人て三百よきまて行り
ぶらとくふさまゆをよ人ぶくうし広くん
るうるをうるすたこうひぜんとはるひぶれを
ちやはけくおくうはくくうへちうたいのしう
ぶむすをるむるこうたいはちをくなるを
たとやされを一くんうんつかいそゆるうへを我
ぶ一人はをるう人はうんすへきにうすて六
はるをいて行て文られのひよりり小書さはくを
忘のよやさ人のをひやをのるを三きいふ
てはやいはは行はたたをつひひ一をらま我よ
うてをたてられくんりそれをま京都をはちを時
もくめをおはあるさをるはうはるを

はまをナハさひうてお出京しを京大ちのものせう
くうをさのをくおつすを上人はりはくくんくう
を中はれはられをいうはもくくうを
うひいしのやはるをれをちうくをりす
をるまはさるはをふを京はくきを三日ちをく
事ををくめはてすを三日ちをかりうむうん
をなれりう忘はちう人二赤ひやうを八ちちの
園の住人りはれうんのうをのてるうはて作ふ
うるきうりう恵せひをうを忘やをうれしはゆ
道念をいはれはをるを
をうくくれてうはの家をうつあら
うんはくはれさはのの事

をゝろかを上とゝ申候島ゝ院ゝそゝまゝ
れたりくゝのゐんすゐ申はしはゝなりはゝあうひふの
見はむとへさ歩ゐをせいむをなほゝのさきをと
ゝを一ゐうきやうの二かんのきくなり人れしう
たんをやとめうゝまきをそうゝまりきを文学二家
を浮うゝりんはむよへさ敷はて西ををされとせ
きせのゝよいのうまゝーて二うやを位うはを事
せんゝもうゝひそれやきゝもうゝくゝ敬れをゝ祖
やうれ子す西はを光を西月十八日太大将うゝ遣はは
ひゝのう田ゝむかんれうゝをたをみけるふあう
れをゝ人ふ弟ゝを二ゝ家ゐめのゝ岩神れ
家麺をゝよせゝれくハすふあまりてゐひのる

見ゐはゝれ國を月のゝうれるゝりんゐくゝなのゝれ
けるゝ時はうはゝき事ゝをゝとのはひゝりうゐめゝ
ゆ上をゝきゝやうの上をゝまゝそゐのゝうをゐひゝれゝ
ゝん叶くゝきゝやうゝをゝんゝたゝやふゝを天てゝをゝ
のゝれゝをわうなゝれゝる國をむのへ家ゝせゝん
すゝをれゝとゝそのゝゝをゝるけるはゐふゐゝの國ふ
て思ひゝをゝゝきゝれゝうゝをゝんゝやうゝてやゝり
りんはゐりんをゝこゝせのゝそゐ久三年七月十三日
うゝなうゝれゝをゝたゝうひゝりゝくゝふゝうゐかゝれ
れゝをゝるゝふ麺なのゝれゝをれゝまひゝるゝを文学の
をんねんゝそはゐを麺をゝ
六代はゐおちうゝきゝはゝくゝる

さて六代ゝの御事たゞねも御うくわんのゝ
たゝんゝくもなかのそれのそなへゝゝふをさゝ
きて平家れいをとうすりうきんの叡くをうをなり
すてゝゝゝさてくうん人すけたりのよ位をくゝゝめ
ゝるとてすゝうのゝふのちうすんをうをれ三ゝ大
丈のてふうけて鎧をれひつらさうのまそ世九の年
ほ井ゝこゝゝきれまひぬ十二のゝゝゝるを世九まそ
のひけるゝ長ゝるのゝゝうんをんの御ゝうらひと
そ世をゝゝるそれゝるをしそをゝをい者のをうんを
ゝをそゝけゝる

平家物語巻第十二終

110X
123
9